

# 言葉の力の育ちに関する保育者の意識について

梅田 優子\* ・ 伊與部ベサニー\*\*

## Investigation into Japanese Early Childhood Care and Education Professionals' Consciousness of Language Development in Children

Yuko Umeda ・ Bethany Iyobe

キーワード：保育者の意識、言葉の力の育ち、領域「言葉」、半構造化面接

Key Words : early childhood care and education professionals' consciousness, language development, "language" as a curriculum component, semi-structured interview

### 1. 目的

乳幼児期における言葉の発達著しく、幼稚園教育要領及び保育所保育指針において、領域の一つとして「言葉」が設けられていることにも明らかなように、保育においても子どもの言葉の育ちを援助することが大切な内容であると位置づけられている。

これまで、保育及びその近接分野における乳幼児期の言葉に関する実証的な研究としては、大久保<sup>1)</sup>、岡本<sup>2)</sup>にみられるように、子どもの言葉の発達の変容に焦点をあてたものが主であった。また、正高<sup>3)</sup>、麻生<sup>4)</sup>ら、言葉が言葉として成立していく初期に焦点が当てられているものが多い傾向にもあった。最近では、個々の子どもに焦点をあてただけでなく、集団保育場面において、子ども同士の対話がどのようになされ変容していくかを明らかにしようとする取り組みなどもなされている<sup>5)</sup>。淀川<sup>6)</sup>は、保育所で過ごす2-3歳児同士が食事場面で、様々な事物や自分の経験等についてどのように伝え合っているか、発話の応答性に着目し、その特徴がどのように変化するかを明らかにしている。淀川によれば、時期を経るにつれ、複数の

出来事について互いに関連づけながら応答し伝え合うようになっており、これは幼児同士の二者間の対話分析や、親子の二者間対話分析では見られなかったとのことである。また、食事場面における集団での対話では、必ずしも一人が話し続ける必要はなく、複数名により対話が維持されるため、より多くの対象児が互いの応答を引き出し合いながら、対話を楽しむ姿が見られるようになったとのことである。

このように子どもの言葉の発達の変容に焦点が当てられてきた一方で、保育者が、子どもの言葉の力の育ちをどうとらえ、どのようなことを大切に援助を行っているか等に焦点を当てた研究はあまりなされてきていない現状にある。子どもの言葉と援助の関係についてとりあげた数少ないものの一つとしては、保育者としての立場から、子どもの言葉を育む働きかけの可能性としての「空間」に着目した横山<sup>7)</sup>の取り組みがあげられる。横山は、3歳児以上の実践場面をとりあげ、保育者が子どもの「主観的な空間」を理解し、それを変える働きかけをすることにより、言葉の背景も変わり、言葉が豊かに生まれる可能性をひらくと述べている。

\* 新潟県立大学人間生活学部 Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

\*\* 新潟県立大学国際地域学部 Faculty of International Studies and Regional Development, University of Niigata Prefecture

他には、絵本の環境<sup>8)</sup>や、入園年齢クラスの保育者が読み聞かせの間にどのような動作や発話をしているのか、また、保育者の言動がどのように幼児の発話に影響しているのかを検討している研究<sup>9)</sup>がみられるが、いずれも限定された場面での保育者の環境構成や援助となっている。

そこで、保育者が子どもの言葉の力の育ちについてどのようにとらえ、またどのような援助を意図しているのか、まずは保育者への半構造化面接の手法を用いて探索的な調査を行った。本稿においては、その面接調査のうち、「言葉の力」を保育者がどのようにとらえているかについて検討考察を行うことを目的とする。

## II. 方法

**調査方法：**午前中に保育参観をおこない、午後から面接調査をおこなった。面接は原則的に1人あたり1時間程度とした。レコーダーとメモを用いて記録した。録音については、面接の開始時点で研究内容と録音内容についての取り扱いについて説明を行い、対象者の許可を得ておこなった。

**調査時期：**2013年6月～9月

**面接対象：**新潟県内の保育施設（幼稚園及び保育所）4園において、3歳児～5歳児のクラス担任をしている保育者13名と、施設長ないしは主任4名（経験年数レンジ：3～40年）である。

**質問項目：**幾つかの質問項目を記載した面接ガイド用紙を面接者2人が手元におき、面接を実施した。質問項目は、「言葉の力から想起されること」「子どもの話すことと聞くことの育ち

について」「言葉の力が子ども達の生活に与える影響」「言葉の力の育ちのために意識していること、あるいは意識した活動」「子どもの年齢によって期待している力に違いはあるか、あるとすればどのような姿か」といった内容である。これらの質問を、面接者の状況や回答に応じて順序を入れ替えるなど半構造化面接をおこなった。方向性を保ちつつも、面接者の語りに沿って情報を得ることが、今回の探索的な取り組みにおいては必要と考えたからである。本稿においては、言葉の力から想起されることの回答を主にとりあげて検討することとする。

## III. 結果と考察

### 1. 「言葉の力」から想起される内容

分析にあたっては、面接の逐語録を作成し、意味の単位ごとにセグメントとして切り出し、各セグメントに定性的コード（以下コード）をつけた。コードごとにセグメントの内容を読み返し、コード間の差異を明らかにしながら、必要な箇所はコードの再割当てをおこなった。さらに、内容の関連が深いコードをカテゴリーとしてまとめた結果、「言葉の力」から想起される内容については、「コミュニケーション」「言葉以前に大切なこと」「言葉のもつ力」の3つカテゴリーに分類することができた。各カテゴリーについての言及者数を表1に示す。

#### （1）コミュニケーション

##### 1) 意思や気持ちを伝える

「気持ちを伝える」「思いを伝える」といったように、“伝える”という側面に力点をおいた言及が15名にみられた。語りの内容は以下の

表1 「言葉の力」から想起される内容

(カテゴリー)	(コード)	言及者数
コミュニケーション	意思や気持ちを伝える	15
	言葉をやりとりし心を通わせる	13
	気持ちを表す	5
言葉以前に大切なことがある	安心感・安定感	6
	さまざまな経験	3
言葉のもつ力	言葉のもつ力の大きさ	4
	言葉では表しきれしていない	1

ようなものであった。(語られた内容例を以下に示すが、語りによくみられる同じ言葉の繰り返しなど分かりにくくなると思われる場合は、発言の一部を簡略化している。)

言葉の力って聞くと、自分の思いを相手に伝えとか、自分の思いを、気持ちを出すとか、そういうコミュニケーションとかに使うものかなと思って。言葉の力がついてきたとか、そういう切り方をすると、この子は自分の思いを伝えられてるのかなとか、そういうふうなことを感じます。

友達とか、大人の人に、自分の思いをどれだけ伝えられるかとか、分かってもらいたくて発する言葉っていうイメージが。自分が出したい思いとか、伝えたいことを、いかに表に表すのかっていうイメージがあります。

気持ちとつながっているものかなというふうに思ってます。今、この子たちもまだ幼くって。要求とか、やめてほしいこととかが言えなくて。「ねえねえ」って怒ったり「うん」で終わってしまう。どうしてほしいのとか、その先をもっとこう出していったほしいんですけど。こっちの思いとしては、「ねえねえ」じゃ分からないんだよ。その先「一緒に遊ぼう」とか、そういうのと言えるようになってほしいなって思ってるので。うん、こういう自分の気持ちを上手に表すための、その道具じゃないですけど。ま、言葉って。こう。大事なかなって。うん。

このように、子どもが自分の思いを言葉にして伝えようとする、あるいは言葉で伝えられているかといったところへの着目である。これらの保育者のとらえは、その先に「お互いに伝わり合う、会話する」「コミュニケーションがとれる」といった双方向性をもつ子どもの姿が思い描かれており、その一歩としての「自分の意思や思いを伝える」という意味合いをもっているように感じられた。それが顕著に伝わってくるのが以下の例である。

やっぱり子どもたちなりに自分の気持ちってありますよね。だから、その自分の思ってる気持ちを言える、相手に伝えるっていうことで、すごく大事なことだと思うんです。それで、3歳児は、なかなかそれができないから、自分が嫌なことがあれば、別な方法で自分の気持ちを伝えてしまうことがある。悪いことにしても。なんだけど、4歳5歳になってきて、やっぱり自分の思ってることを相手に伝わって、相手のお友達がそれに、また一緒にお話ができるっていうことが、すごく会話を楽しんでいる様子が、年齢を追うごとに、すごくこっちにも伝わってくる。子どもたち同士で、すごく自由に楽しい、食事のときでもそうだけど、もうケラケラ笑いながら話してる姿を見ると、やっぱり言葉の力って、すごく人間の中で、とっても大きなもので、やっぱり自分の気持ちを相手に伝えるっていうことは、とても大事なことだになっていうふうに思います。

## 2) 言葉をやりとりし心を通わせる

言葉をやりとりし、伝え合うことで「心を通わせる」「関係が築かれていく」といった「双方向性」を意識した言及が13名にみられた。以下のような語りである。

言葉はやはりあの心を通わせるととても大事な道具というかね。ものですよ。だと思ってるので、あの言葉なしでは人間の気持ちは伝わらないかなと。まあジェスチャーとかそれはあるかもしれないけども、やっぱり言葉あることでよりよく言葉のコミュニケーション図れて相手が気持ちが分かるというところかな。

集団生活ですよ。なので、言葉っていうのが、まず、人と関わる、基本になるかなって思うんです。3歳児なんかは、泣いて、泣いたりとか、怒ったりとか、笑ったりっていうのも、自分が表したい言葉の裏返しとして、そういう表現方法ではきまずけれども、4歳、5歳と年齢を重ねるごとに、言葉によることで、やっぱり人とうまく関わったりとか、思い通りにならないことも伝えたりとかっていう、ことができますので、言葉があることによって人と関われるって思っています。

気持ち。気持ちを伝えること。うん。自分の気持ちを伝えて、相手の気持ちを分かるとか、そういう意味の気持ち。お互いの気持ちが伝わるっていうのは、目と目を合わせて、どんな表情で言ってるのかっていうのが分かる。だから、聞くときにはそういうふうな、目と目を合わせながら聞く。話すときも目と目を合わせながら聞くっていうことですね。

「気持ち」と「言葉」が強く関連づけられ、気持ちを言葉で表現し、それがお互いに伝わり合い、わかりあえるといった点への着目である。また、気持ちを言葉で表現するようになってほしいといった保育者の思いが強くあることも窺えた。

### 3) 気持ちを表す（言葉で表現し伝えようとする気持ちを引き出す）

「言葉で伝える」ようになる以前の姿への着目であり、それも言葉の力へとつながるものと意識して大切に援助していきたいとの視点であった。

伝えるという意識が薄くても、自分の気持ちや思いを言葉で表現するところも言葉の力と考えて大切にしていきたいとの内容や、気持ちが共有されている状況に言葉を添えていくことで、言葉で表現し伝えようとする気持ちを引き出すような援助について語られていた。

パッと出る言葉というか、トンボ見て、「あ、トンボだ」とか今日も言ったりしてたんですけど、そういうパッと出る言葉っていうのをドンドン拾ってあげたいかなって思ってた。なので、伝えようとするのも大事だけど、そこまではあんまり望んでないって言ったらおかしいですけど、高いところまで望まないかなって思って、いつも3歳とはいます。（中略）3歳は、どっちかといえば、相手に伝えようと思わなくてもいいから、出してほしいというか、こっちが聞く側に回って回って、聞いて聞いてっていうふうに、言いながら話してもらったりするといいかんと思ってて。

話すほうも、心動いてというか、聞いてほしいとか、見てほしいとか、一緒にやりたいとか、そういう心動いて、多分最初は、まだ、3歳とか言葉にならないと思うんですけど、それをまず先生が、言葉を合わせてあげて、「やりたいんだねー」とか、合わせながら、だんだん、そういうの気付いて、自分から話したいみたいになって、自分の言葉を獲得しながら、表したいみたいな、そういう気持ちの動きみたいなのも、大切にしたいかな。そういうのが入ってるかなと思います。

この先生だったら、僕がちょっとぐらいわがまま言っても大丈夫とか、僕が困ってること言っても大丈夫、うれしいこと言っても大丈夫、だから僕は表したいなって思って、それが、最初は言葉ってなかなか出てこなくて、ほんとに最初は表情とか。こっち（保育者）がどれだけ敏感に感じ取って、そうだね、「うれしいねー」とか、言葉で返していったときに、その子の中で、だんだんだんだんと、距離も縮まっていった。最初は距離が空いてたのが、今度は私の隣に来てニコってするようになって、次に「先生これ楽しいね」とか、「うれしいね」って、言葉で今度出てくるようになったりとか。何だか、段階がやっぱりあるのかなーと思って、私は見えています。

“伝達”の意識がまだ子どもの育ちに出てきていなくとも、子どもの中から思わず出てきた「つぶやき」を大切にし、それに共感していく言葉を保育者から投げ返していくことで、伝わることの嬉しさを体験したり、お互いに気持ちが通い合っている状況に言葉での表現をのせていくことで、より気持ちが伝わり合う楽しさの体験することが言葉の力につながるのとらえがあることが窺えた。

## （2）言葉以前に大切なことがある

### 1) 安心感・安定感

既に前述の保育者の語りの中にもでてきているが、園生活においてはまず、その園という場で子どもが安心感や安定感をもてるようになることが重要であり、そうした中で自分を表現しはじめ、そこに言葉での表現（話すということ）もでてくるとのとらえである。

表すには、確かに自然に自分から出てくるのもあるんですけど、どうしてもそこに今度、自分を出せるかどうかというところが出てくるんです。この幼稚園でとこで、安心して、私にも安心をしてくれて。(中略) その言葉の力を持つにも、根底にはやっぱり、自分のことを大好きでいてくれる人たちもいっぱい居て、安心して自分のことを出せるんだよって。怒ってるのも、気に入らないことも、うれしいことも、楽しいことも。それはたまに、ときにはやりすぎて叱られることもあるけれど、でも、ギューっと自分が出せないような環境にはないんだよって。そういう子たちは、少しずついろんな経験を踏んで自信も持ちますし、自信を持ってくると、言葉の力ももちろん吸収するんですよ。

やっぱり、人に愛されているっていう、思いが存分にあるっていうことが3歳の土台だと思うんです。いわゆる安定っていう。それが言葉にもつながって。入園期はほんとに、そこに居るだけで、どうしたの？みたいな感じで。初めてのクラス、(初めての) 担任ですから。それを私たちが、いかにこの人(子)に受け入れてもらうかっていう、私たちはあなたを守るよっていうところを、分かってくれるような、雰囲気醸し出さなきゃ駄目です。「どうしたの?」、「どうしたいの?」っていきますけど、そのときは泣いてても、指さしても、「あ、そうなんだね。お水飲みたいんだね」って(こちらが汲み取って)「うん」で頷ければもうそれで十分、っていうところですよ。

## 2) 様々な経験

子どもは、伝えたいことがあれば、伝えよう、話そうとするようになるのととらえである。その「伝えたいと思うこと」に出会わせていく援助が大切であるとの意識が感じられた。

見つけたこととかを言ってほしいなっていうときには、- 今日みたいに、ちゃんとトンボ、こうやって寄ってって、あ、止まったとか-、何かいろんなものに出会わせてあげたいなっていうのは思ってます。お花だったりとか、やっぱり、自然に出て、自然のものを見つけると、全然関わりない友達なのに、ね、これ見てとか、いうのがよくあるな-って自分も感じるの、そういうところは大事にしてあ

げたいな-って思ってるので。できるだけ、ほんとに外出たりして。(中略) いろんなものを見ると、やっぱり言葉も変わってくるかなって思ってる。何か見つけたものを、ただ、見つけて、「あ」とか言ってるだけじゃなくて、いろいろいっぱい言葉にすることを春からも重ねているので、どうしても伝えたいかなとか、思う。あ、今、言いたいんだなっていうところも見られるので、やっぱりそれっていろいろ経験積むことが大切なのかなって思ってます。

3歳のこの子たちにとって、言葉の力ってのはもちろん、大きな大きなものだと思うんだけど。コミュニケーション、友達とのコミュニケーション、もちろん私とのコミュニケーション、お母さんとのコミュニケーション、大事な大事なことだとは思いますが、やっぱりその根っここの部分というんでしょうか。人間形成、子どもたちの一番の根っこ、嬉しい、楽しい、悲しい、切ない、あと苦しい。いっぱいありますよね。感情。その感情を受け取ったり、感じたりするのは、あの子たちで。その経験値から言葉になるというか。経験からの発する言葉っていうのの力の大切さ。よく感じてよく経験して、自然にあふれてくるというか、育っていくっていうか。言葉も育っていくものなんですよ。どんどんどんどん、幼稚園での友達関係を経て、それから嫌なこと悪いこと経て、いいこと悪いことも分かって、嬉しいこと楽しいことも分かって、すこーしずつ子どもたちが覚えていくことなのかなっていうのが、勝手に思ってるだけなんですけど。

どうしてもなかなか自信持てないし、安心できないしっていう子にも中には言葉だけは知っている(子がいるんです)。いろんな表現方法も知ってる。でも、そこに体験が伴っていないので、どうにもこうにも、言葉は知ってても、それはほんとに力としては発揮していけないんですよ。

様々な体験をすることが話すことにつながるというのと、さらには、そうした経験に裏打ちされた言葉を話す子どもに育てていきたいとの意識や構えが窺えた。

### (3) 言葉のもつ力

#### 1) 言葉のもつ力の大きさ

言葉のもつ力の大きさへの着目が4名にみられた。以下のような語りである。

言葉の力って聞くと、私は、勇気をもらえとか、すごく、その言葉で励ましにもなるし、力にもなるし、勇気にもなる。

こういう幼稚園に来て子どもってというのは幼いから、経験も、体験も少ないから。その分やっぱり、私たちのちょっとした言葉とか、ニュアンスとかを、すごく吸収するから。すごく影響力強いなっていう印象あります。(中略) 子どもの言葉の力。私も子どもから言われて気付くこともあるだろうし。あと、お友達同士の言葉のやり取りで、すごく気付いたりすることはあるので。大人よりも、子どもの言葉のほうの力が強いんじゃないかな。子ども同士の会話って本当、何気なくポツと出てくるものだから。お友達が、何々ちゃんがこういうふうに言ってるからっていうような感じで。それによってまた子どもが変わっていったり、何かができるようになったりっていうようなことを見たり。私が、気付かないところで、子どもがやり取りして、何かに向かっていけるようになったりっていうことがあるので。言葉はすごいなと思います。

何か発して伝えたいこととかを、大人に話すときの伝え方と、子どもたちに響くというか、心で子どもたちが受け止めてくれる言語っていうのは、違うんじゃないかなって、今保育してて(思います)。日々、この言い方で私は通じると思ってたのに、全然なんかボーッとしてて、ああ、分かってないんだとか。逆に、ちょっと変えただけで、すごい理解してくれる子がいたりするので、言葉の力・・・その、響く、何ていうか、力。心に響いた大きさというか、そういうイメージが(あります)。

このように、言葉のもつ力の大きさや影響力を、保育者としての立場から実感している様子が見えがえた。比較的保育歴の少ない、若手の語りにみられた内容であった。

#### 2) 言葉だけがすべてではない

一方で、言葉で表されることの限界についての言及が1名の保育者にみられた。

(障がい児の施設にずっと長くいて)療育にあたってきた、保育園の勤務になったんですけど、子どもの言葉っていうのはやっぱりその環境から育まれてきてて、で、まあ大人も私多分そうだろうと思うんですけど、表出言語がそのままその人の心理を100パーセント表すことでは絶対ないと思っています。子どもさんたちは、あのママに叱られると「ママ嫌い」って言っても、嫌いなわけは絶対ないわけですし。けんかして「もう遊ばない」って言ってもまた次1時間後ぐらいには遊んだりとか。それは、全然うそではなくって、あの本当の本当に100パーセント嫌いなのかって聞かれたら、そんなことは絶対なくてママのことはもう大好きで、で、そういうふうな中で子どもは多分生きている。大人も自分の今の気持ち、複雑な心境を文字にしろとか、文章にしろとか言われたら、どんなに言葉が堪能な方でも多分そんなに簡単にはできないと思っていることを前提に子どもと付き合っています。

これは、療育の分野での経験もある保育歴の長い保育者の発言であった。保育者自身が、この内容に言及する前に、自分の保育者としてのキャリアを語っていることから、保育者としての経験のありようが、自身の「言葉の力」への意識の形成に影響しているとの思いがあることが示唆されるだろう。

### 2. 「話す」ことと「聞く」ことについて

今回の面接調査において「言葉の力」という表現を用いたのは、領域「言葉」では、「話す」ことだけでなく「聞く」ことも含めて、とりあげられているからである。「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」<sup>10)</sup> 観点から、ねらい及び内容が示されているのが領域「言葉」である。そのねらいは幼稚園教育要領<sup>11)</sup>では、以下の3つがあげられている。「(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話をよく聞き、

自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」である。保育所保育指針<sup>12)</sup>においても、(3)の「先生」の部分が「保育士等」となっている点に違いがあるだけで、まったく同じ記載内容となっている。そこで、保育者が「言葉の力」の育ちとして、「話す」ことと「聞く」ことの育ちをどのようにとらえているかについて次にみていく。

なお、面接中に保育者が「言葉の力」について語る中で、自ら、子どもの聞く力について言及がなされた場合には、その保育者の話の区切りがついたところで、子どもが話すことと聞くことについて幼児期においてはどちらの育ちがより大切ととらえているかについて確認的な質問を行った。保育者の自然な語りで言及がなされなかった場合には、面接の流れの中で質問を行うようにした。その結果を表2に示す。

表2 「話す」と「聞く」の育ちについて

「話す」力の育ちが大切		10人
「聞く」力の育ちが大切	聞いて身につける	4人
	相手の話を聞く	3人

### (1) 話すこと

幼児期の言葉の力の育ちとしては、話す力の育ちがまず大切との意識をもっている保育者の言及は17名中10名であった。

聞く話す。大体でいうと、まずは、自分のことを話す。もちろん話す。3歳。話してもらって、話したことを、まずは私が、大人、教師が受け止めて、聞いてあげて。受け止めてもらって、話聞いてもらって嬉しい。先生から聞いてもらったら、何か楽しい。伝わったという嬉しさを私と味わって。そこから今度、だんだん友達に発信して。だから、まずは話す。そしてそれが楽しいことで、聞くこともだんだん、経験値の中で。(中略) 順番を付けるとしたら、3歳としたらやっぱり、まずは表して、話してほしいというところですね。

話すっていうことに関してはやっぱり、受け手が十分、存分に、存分に聞いてくれるっていうことがあると、やっぱり自分も話をしようかなって思いますし、その次に、話聞くって楽しいとか、お話しするの楽しいっていうことになる、例えば先生の話聞くっていうところにつながっていくかなと思うんですけども、やっぱり受け止めてくれる誰かが必要。話す、聞く。言葉の力っていったときに、8割方、話すほうかなと思うんですけど。

そうですね、やっぱり年齢が低いと、話すことのほうが多いと思うんです。自分が思うことだけをバーッと言う。でも5歳児ぐらいになると、そのお友達の話すのに耳を傾けて、「ああ、そうだね」って言って、「じゃあ、こうしようか」っていうふうに、1人のお友達が言って聞いてくれたことによって、遊びも発展していく。なので、やっぱり発達につれて、聞く力も出てくることによって、また関わりがより深くなっていく。3歳児のときは、やっぱり大人、私たち(保育者)が子どもたちの話をたくさん聞いてあげる。語彙(ごい)は少なくって、よく伝わらない部分はあるんだけど、たくさんお話を聞き出してあげて、たくさんお話をしてもらって、私たちが聞いてあげることで、やっぱり子どもたちも安心してまた話したくなるんじゃないかなと思うので、やっぱり耳を傾けてあげることが、3歳児さん4歳児には大事なと。

子どもが話し、それに保育者が十分に耳を傾けることによって、子どもが聞いてもらって受け止められ、通い合った嬉しさや楽しさを経験することが大切で、その経験が基盤となって、相手の話を聞こうとする姿勢が育っていくのとらえがあることが窺える。

### (2) 聞くこと

「聞く」力の育ちが大切との言及が、17名中7名の保育者にみられた。2通りのとらえがあることが明らかになった。

#### 1) 聞いて言葉を覚えていく ～言葉の環境～

話す前に自分の耳に入れて、言葉を覚えたりとか、こんなふうに言うんだとか思うので、聞くほうがやっぱり先にくるのかなっていうイメージはあります。うまく聞ける子

ほど、自分の思いを伝えられるかなっていうふうに感じます。

幼稚園（は）、集団なので、最初はやっぱり先生の言葉に耳を傾ける、先生の声って何か温かいとか、先生って自分のことも聞いてくれるし、面白い話もしてくれるなっていうところから入って、友達の笑い声が聞こえて何だろうみたいに、興味を寄せ始めるところから、だんだん・・・。（中略）日々生活する中で、子どもって自分の必要な言葉を受け取りながら、（生活）してるかなって思い。あまり、否定的な言葉じゃなくって、肯定的なっていうか、心地よい言葉の環境になるように、日々、気を付けて（います）。

子どもが言葉を話すようになるにあたっては、子どもにとって大切な大人からの語りかけや、周囲で交わされる言葉の環境の中で子どもなりに吸収していくとの認識がある。そのため、言葉の環境の大切さや、環境としての保育者の言葉のありようについても併せて言及しているところに共通性が感じられた。

## 2) 相手の言うことを聞く（聞いてわかる、聞き入れる）

子どもが聞くのも、大人と子どものやりとりでも、子ども同士のやりとりでも、話すだけじゃなくて、聞くとか、相手の聞き入れるっていうのが（大事）。でも、それはなかなかみんながすぐできるっていうわけじゃないんだなっていうのも、すごく分かったし。聞きたくなって聞いてないわけじゃないというか。どうしても話すのが好きで、なかなか黙ってというか、最後まで聞くのが難しいというか、そういうお子さんももちろん居るんだけど、ちょっとでも相手の思いを聞く、話すっていうことで、遊びとかも楽しくなるし、その子にとってもいいことが、学校に上がるにしても、大事なことだとすごい思います。

言葉の力っていうと、やっぱり、聞く力というか。子どもでも多分、そうだと思います。それがメイン。目と目を合わせてちゃんと話を聞けることが大事だっていうことだと思います。話すときももちろんそうだと思いますけど。やっぱり聞く。

3歳は、やっぱり聞く力。聞く力で、けんかとか何かトラブルになったときに、聞く力がなければ解決のしようがないから。で、聞く力と言葉っていうのは経験と知識と気持ちが備わって育っていく。多く子どもたちに、そういう場を提供してやるっていうか。そして、だんだんだんだんそれで言葉が分かってくる。だから、どっちにしても3歳から5歳は聞く力だね。

これらの保育者には、3～5歳の幼児期においては、話すことはできるので、「伝えあう」「話し合う」という双方向性を育てていくには、相手の話を聞こうとする力の育ちが必要であると感じていることが窺えた。

## IV. 総合考察

### 1. 保育者のとらえる「言葉の力」について

今回の面接調査から、保育者の多くは幼児期の子どもの言葉の力を、コミュニケーションの側面からとらえていることが明らかになった。これは、3～5歳児期が言葉でのコミュニケーションがとれるようになっていく育ちの著しい時期であること、その育ちを引き出し、支えていきたいとの保育者としての構えによるものではないかと考えられた。

保育者が「コミュニケーション」という表現を用いるとき、そこには“伝え合い、通い合う”という姿を思い描いていることが感じられた。その“伝え合い、通い合う”楽しさや嬉しさを子どもたちが経験することを実現するために、「自分の思いを伝える」あるいは「伝えよう」とすることを支えていくことが大切であり、それには先ず保育者が聞き手になることが必要であること、また、保育者が子どもにとって伝えようと思える相手であることが大切とのとらえがあった。そして、実際に子どもが言葉として表現していれば、それは言葉の力がついてきているととらえるが、同時に言葉を使って伝えられなくても、伝えようとするその姿勢が言葉の力につながる大切な芽生えであるとの認識があることが窺われた。幼稚園教育要領や保育所保育指針で示されている各領域におけるねらいは、「修了までに育つことが期待される生きる



力の基礎となる心情、意欲、態度などである」<sup>13)</sup> (下線は筆者) とされているように、保育においては、自ら“しようとする”姿勢を育てていくことが求められている。そうした心情、意欲、態度を大事にしていこうとする保育者のとらえがあったといえるだろう。

さらにそれが、「言葉の力」で想起されることを尋ねた質問に対して「言葉以前に大切なことがある」との回答がなされることとつながっていると思われた。保育者によっては、子どもにとって園が安心感・安定感を持てる場であること、そこでは特に保育者との温かい信頼関係が言葉の力を育てていく基盤となるととらえている。また、同時に、伝えたいと思うことが起こること、すなわち、様々な経験ができるような環境を準備し、出会えるような状況をつくっていくことも保育者の援助の一部ととらえられていた。

伝えたいと思う相手に伝えたいことが伝わる喜び、受け止めてもらえる喜びを基盤として、言葉で伝えようとする姿勢を育て、また、実際に言葉で伝わることで気持ちが通い合う喜びや楽しさを味わうことで、より言葉で表現する楽しさを育んでいこうとする、こうした保育者の意識は、領域「言葉」のねらいと重なり合っていることも見えてきた。領域「言葉」におけるねらいは、「(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」<sup>14)</sup> (下線は筆者) である。また、領域「言葉」の「内容の取扱い」であげられている留意事項「(1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。」<sup>15)</sup> との記述とも重なる。今回の面接調査で明らかになった、保育者の子どもの言葉の力の意識、あるいはその言葉が育つ背景としての環境への意識は、保育内容の基準を定めているとされている、幼稚園教育要領及び保育所保育指針で目指されている方向性と、かなり重なり

合っていることが明らかとなったと言える。

## 2. 「話す」と「聞く」について

面接した保育者 17 名中 10 名は、幼児期の言葉の力の育ちとしては、話す力の育ちがまずは大切との意識をもっていた。子どもが表したり話したりしたことを十分に聞いてもらい、受け止められ通い合う嬉しさや楽しさを経験することが基盤となって、相手の話を聞こうとする姿勢が育っていくとの意識があることが窺えた。

「聞く」力の育ちが大切とのとらえには、2 通りのとらえがあることが明らかになった。一つは、子どもが言葉を話すようになるにあたっては、子どもにとって大切な大人からの語りかけや周囲で交わされる言葉の環境の中で、子どもなりに聞いて言葉を覚えていくとの認識である。そのため、言葉の環境の大切さや、環境としての保育者の言葉のありようについても併せて言及されている点に共通性がみられた。もう一つのとらえとしては、3～5 歳の幼児期においては、“言葉のやりとり”といった双方向性の育ちがなされる時期であり、そのためには、相手の話をきちんと聞く力の育ちが必要であるとの意識をもつ保育者の存在もあった。

これらは、子どもが言葉の力を身につけていくプロセスのどこに焦点を当てているかの違いとも考えられた。いずれも、子どもの言葉の力の育ちにおいては必要な体験であり、また援助となってくるといえるだろう。幼稚園教育要領や保育所保育指針の解説書においても、この双方の面についての記述がなされている。ただ、こうした「聞く力」のどちらにより力点をおいてとらえているかは、園による共通性が認められる面があり、保育のありようと関連しているのではないかと感じられた。

## 3. 「ことばの力」について

近年、「ことばの力育成事業」や「ことばの力育成プログラム」といったものが、様々な自治体の教育委員会で実施されている。これは、平成 20 年の学習指導要領の改訂で、「ことばの力」がすべての教育活動の基盤として位置づけられたことによる。

たとえば、ある自治体の「ことばの力」育成

プロジェクトにおいては、「小学校入学前から小・中学校、高校までを見通し、あらゆる教育活動の中で『ことばの力』を育成する」とされた取り組みがなされている。その内容のなかで、「幼児期からことばの力を育成することが重要」とされ、幼・小連携の取り組みとして、「小学校の学習をスムーズに始めるための『聞く力』『話す力』を身に付ける」とされている。

「ことばの力」育成を大切なものと考え、小学校入学前から高校までを見通すこと、また、幼少連携をとることは大切であり、必要な取り組みではある。しかしながら、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」<sup>16)</sup>の中で示されているように、「幼児期の教育と小学校教育では、互いの教育を理解し、見通すことが必要」であるが、その際「幼児期の教育と小学校教育は、それぞれ発達の違いを踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意」する必要があるとしている。

「ことばの力」についても、幼稚園での取り組みが、小学校での学習をスムーズに始めるための文字通りの“準備”とされてしまうことにならないようにしていくことが必要である。幼児期は、幼児期にふさわしい言葉の力を幼児期に適切な方法で十分に育むことが、結果として小学校以降にもつながっていく、そのあり方を考えていくことが求められている。こうした状況を鑑みると、保育者が言葉の力の育ちやその援助に関してどのような意識をもっているのかをより詳しく明らかにしていくことが必要であり、保育者の保育歴による違いや、子どもの年齢の違いによる発達のとらえ（発達観）等、今後さらに検討考察すると共に、実際の保育者のかかわりや援助のあり方についても明らかにしていくこと必要だと考えている。

また、園内での保育者に共通性のある発言がみられたところもあり、その園で目指している保育の在りようや、園内での話し合いの状況等との関連性があるのではないかと示唆された。その点について明らかにしていくことも今後の課題としたい。

## 謝辞

保育参観及び面接調査に、お忙しい中ご協力くださいました園長先生はじめ先生方皆様に心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- (1) 大久保愛 (1975) 幼児のことばと知恵. あゆみ出版
- (2) 岡本夏木 (1982) 子どもとことば. 岩波新書
- (3) 正高信男 (1991) ことばの誕生. 紀伊国屋書店
- (4) 麻生武 (1992) 身ぶりからことばへ. 新曜社
- (5) 淀川裕美 (2011) 2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化—確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して—. 保育学研究 49 (2) . 61-72
- (6) 淀川裕美 (2013) 2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化—伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して—. 保育学研究 51 (1) . 36-49
- (7) 横山洋子 (1998) 子どものことばが生まれる背景としての空間—ことばの視点からの保育場面の考察—. 保育学研究 36 (2) . 38-44
- (8) 山田恵美 (2011) 保育における空間構成と活動の発展的相互対応—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—. 保育学研究 49 (3) . 20-28
- (9) 並木真理子 (2012) 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. 保育学研究 50 (2) . 75-89
- (10) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (11) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (12) 保育所保育指針 (2008) 厚生労働省
- (13) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (14) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (15) 幼稚園教育要領 (2008) 文部科学省
- (16) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について. (2010) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議. 文部科学省